

いづれの御時にか、女御・更衣あまた候ひ給ひける中に、「いとやむい」となきはなにはあらぬが、すべれて時めき給ふありけり。初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに、おとしめ、そねみ給ふ。同じほや、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにはありけむ。いとあつしくなりゆき、も心の細けに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものと思ほじ人のそしりをも、え憚らせ給はず。世のためしにもなりぬべき御まてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつし、いとまばゆき人の御おほえなり。唐土にも、かかることの起りにこそ、世も乱れあしかりけれとやうやう大の下にも、あぢきなり。人のもて悩みべなりて、楊貴妃のためしも引き出でつべくなりゆくと、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心はへのたぐひなきを頼みして、まじらひ給ふ。

(改ページ)

父の大納言は「くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあること」親つし具し、さしあたりて世のおほえはなやかなる御方々にもいたつ劣らず、何事の儀式をもまてなし給ひければ、とりたてて、はかばかしき後見しなげず、ことあるときは、なほかりごとくなく、心細けなり。

問題 全ての問いについて、問題に特に指定がなくとも極力漢字で答え、助動詞、助詞、反語、敬語を正確に訳すこと

なお、便宜上、帝に寵愛されている更衣のことを「桐壺の更衣」と呼び「いとよき」

一傍線部「いづれの御時にか」を口語訳せよ。また、「にか」の後に省略されている語を答えよ。

二傍線部「女御・更衣あまた候ひ給ひける中に」を口語訳せよ。また、敬語を抜き出し、敬意の方向も含めて文法的説明をせよ。

三傍線部「いとやむい」となきことなき「ありけり」を口語訳せよ。また、「が」の用法について、正しく説明したものを次から選べ。

なお、「この作品の成立時期は、一〇〇八年頃である。

選択肢 主格の「が」、逆接の「が」、連体修飾格の「が」、同格の「が」

四傍線部「初めより我はと思ひあがり給へる御方々」を口語訳せよ。

五傍線部「めざましきものに、おとしめ、そねみ給ふ」を主語と目的語を明らかにして口語訳せよ。

六傍線部「ましてやすからず」を口語訳せよ。また、「ましてやすからぬ」のは誰か、文中から探して現代語で答えよ。

七傍線部「人の心を」にやありけむ」について、口語訳せよ。また、助動詞を全て抜き出し、それぞれ文法的意味を答えよ。

八傍線部「いとあつしくなりゆき、も心の細けに里がちなるを」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

九傍線部「いよいよ飽かずあはれなるものと思ほじて」を、主語と目的語を明らかにして口語訳せよ。

十傍線部「そしり」の意味を答えよ。

十一傍線部「え憚らせ給はず」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

十二傍線部「世のためしにも、御もてなしなり」を、主語を明らかにして口語訳せよ。また、助動詞を全て抜き出し、文法的意味を答えよ。

十三傍線部「上達部 及び「上人」について、それぞれ読みと意味を答えよ(任命される為に必要な条件は答えなくてよい)。

十四傍線部「あいなく目をそばめつし、いとまばゆき人の御おほえなり」を、主語を適宜補い、口語訳せよ。また、「人」とは誰か、答えよ。

十五傍線部「唐土」について、読み、及び意味を答えよ。

十六傍線部「かかることの起りにこそ」について、「かかる」の指示する事柄を明らかにして口語訳せよ。

十七傍線部「世も乱れあしかりけれ」とは、具体的にどういつい歴史的背景をもとに言っているか、説明せよ。

十八傍線部「やうやう大の下にも、あぢきなり、人のもて悩みぐさになりて」を、「あぢきなり」に係る語を適宜補って口語訳せよ。

十九傍線部「引き出でつべくなりゆくと」を口語訳せよ。また、助動詞を全て抜き出し、それぞれ文法的意味を答えよ。

二十傍線部「いとほしたなきこと多かれど」を、主語を補って口語訳せよ(軽度の意識は許す)。

二一傍線部「かたじけなき御心はへのたぐひなきを頼みにて、まじらひ給ふ」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

二二傍線部「父」とあるが、誰の父か。文中の語で答えよ。

二三傍線部「いにしへの人のよしあるにて」を口語訳せよ。また、「人の」の「の」は、文法的にどのような働きをしているか、答えよ。

二四傍線部「親つし具し」を、過不足なく口語訳せよ。

二五傍線部「さしあたりて」けれど」について、口語訳し、「さしあたりて」の意味を答えよ。また、「給ひ」の敬意の対象は誰か、答えよ。

二六傍線部「とりたてて」なければ」を、「よかばしき」に留意して口語訳せよ。また、「後見し」の構成について、文法的に説明せよ。

二七傍線部「ことあるときは、なほかりごとくなく、心細けなり」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇太子なれど生れ
れ給ひぬ、こころかこころまことなむらせ給ひて、急ぎ参らせし御覽おのりの御
つらかなるちこの御かたちなり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹ごはらより、ち
せ重く疑ひなきまがつけの君と、世にまじかこころを聞きゆれど、この御ごは
らには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむじよなき御思ごしひに
この君をば、私物に思ほしかこころを給ふこと限りぬ。

初めよりおしなへての上宮仕入し給ふべきまはははあらざりけ。おほえこ
ごやむことなく、上衆めかしけれど、わりなくまじはせ給ふめまりじ、ち
るべき御遊ごあそびひのをりなり、何事にもゆめあることぶじぶじに、まじまじ
上らせ給ふ、あるときには大殿籠り過へて、やがて候はせ給ひなむ、あな
がちに御前去らずもてなせ給ひしほど、おのづから軽き方にも見えしを
この皇子生まれ給ひてのちは、こころかこころを思ほしおきてたれば、坊にも

(改ページ)

ちせずは、この皇子のみ給ふべきなめりじ、一の皇子の女御はおほし疑へ
り。人より先に参り給ひて、やむことなき御思ひなへてならず、皇女たちな
どもおほしませば、この御方の御いそめをのみぞ、なほむつらほつて、心持
つし思ひ聞きえさせ給ひける。

かこころを御かげをば頼み聞きえながら、おとしめ、きずを求め給ふ人は多
く、わが身はか弱くものはかなきありまじに、なかなかなるもの思ひをし
し給ふ。御同は桐壺なり。

問題 全ての問いについて、問題に特に指定がなくとも極力漢字で答え、助動詞、助詞、反語、敬語を正確に訳すこと

一 傍線部「前の世にも、御契りや深かりけむ」を主語を明らかにして口語訳し、「御契りや深かりけむ」を品詞分解して文法的に説明をせよ。

一 傍線部「世になく清らなる玉の男皇太子を生まれ給ひぬ」を「なく」に留意して口語訳せよ。

一 傍線部「こころかこころまことなむらせ給ひて、急ぎ参らせし御覽おのり」を、主語と目的語を明らかにして口語訳せよ。

四 傍線部「めじりかなるちこの御かたちなり」を口語訳せよ。また、「ち」とは何を指すか、この段落から適当な語を抜き出し、答えよ。
また、「めじりかなる」ちこの御かたちなり」の、それぞれの「なり(なる)」について、文法的に説明をせよ。

五 傍線部「よせ重く」とはどのような状態なのか、簡潔に説明せよ。また、誰について「よせ重く」と言っているか、文中の語で答えよ。

六 傍線部「疑ひなきまがつけの君」の意味を答えよ。

七 傍線部「世にもてかこころを聞きゆれど」を口語訳せよ。また、敬語を終止形に直して抜き出し、その種類を答えよ。
八 傍線部「この御にまじはら、あらざりければ」を主語を明らかにして口語訳せよ。また、指示語、及びその指する語を文中より抜き出せ。
また、助動詞を全て抜き出し、それぞれ文法的意味を答えよ。

九 傍線部「おほかたの」限りなく」を、主語を補って口語訳せよ。

十 傍線部「初めより」まはははあらざりけ」を主語を補って口語訳せよ。また、「上宮仕入し給ふべきまは」を品詞分解し、文法的説明をせよ。
十一 傍線部「おほえこころまことなむらせ給ひて」を、主語を補って口語訳せよ。

十一 傍線部「わりなくまじはせ給ふまじに」を、主語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。
十二 傍線部「遊び」とは、一般に何のことか、答えよ。

十四 傍線部「まじまじ上らせ給ふ」を、主語と目的語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。
十五 傍線部「大殿籠り過へて」やがて候はせ給ひなむ」を、主語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。

十六 傍線部「あながちに御前去らずもてなせ給ひしほど」を、主語を補って口語訳せよ。

十七 傍線部「おのづから軽き方にも見えしを」は、「自然と軽く身分にも見られたが」と訳されるが、その根拠となる事柄を口語で答えよ。
十八 傍線部「この皇子生まれ給ひてのちは」を、口語訳せよ。また、「この皇子」とは、更衣の乙・右大臣の女御の子のどちらのことか。
十九 傍線部「こころかこころを思ほしおきてたれば」を、主語と目的語を補って口語訳せよ。

二十 傍線部「坊にも、よじせずは」を口語訳せよ。

二 傍線部「この皇子のみ給ふべきなめりじ」を、「この皇子」及び「み給ふ」の意味の二つを明らかにして口語訳せよ。
また、助動詞を全て抜き出し、それぞれ文法的意味を答えよ。

二 傍線部「人より先に参り給ひて」を、主語を明らかにして口語訳せよ。また、「参る」とはどのような場合をいっている事が、漢字二字で答えよ。

三 傍線部「やむことなき御思ひなへてならず」を、主語と目的語を補って口語訳せよ。

四 傍線部「おほしませば」の意味を答えよ。

五 傍線部「この御方の」心苦しく思ひ聞きえさせ給ひける」を、主語と「この御方」を明らかにして口語訳せよ。

六 傍線部「かこころながら」を、主語を補って口語訳せよ。また、接頭語以外の敬語を指摘し、終止形で敬語の種類を答えよ。

七 傍線部「おとしめ、きずを求め給ふ人」を、目的語を補って口語訳せよ。

八 傍線部「ものはかなきありまじ」の意味を答えよ。

九 傍線部「なかなかなるもの思ひをし給ふ」を、主語を補って口語訳せよ。また、なぜ「なかなかなるもの思ひ」をするのか、説明せよ。
三十この作品について、作品名、この章段が収められている巻名、作者名、作者の仕えた人物名を、それぞれ漢字で答えよ。

一 訳＝「前世でも、お二人は、宿縁が深かったのだらうか」

品詞分解＝「尊敬の接頭語『御』＋名詞『契り』＋係助詞『も』＋形容詞ク活用『深し』連用形『深かり』＋過去の原因推量の助動詞『けむ』」

二 訳＝「この世のものは思えないほど美しい玉のような皇子様までがお生まれになった」「やぐ」＝「まじ(ま)」「ぬ」は否定。

三 訳＝「帝は、皇子が生まれるのを今か今かと落ちて着かない様子で(お生まれになった)皇子を急いで参上せしむ覧になる」(「参上」は終止形「参る」である。「行く」の謙讓語「参上る」。「せ」は使役の「し」「やゆる」。「覧」は「覧になる」)。「ちい」＝「(((世になく)清らかなる)玉の男)皇子」「(この間に聞こし)こゝを正解するかは採点者の信念によります。)

四 訳＝「たくまわな美し赤ん坊(若面)の容貌(お姿)ひめる」「めつらんかな」「めつらんないだ」「またやないだ」

五 説明＝「前者の『なる』は、形容動詞『めつらんかなり』の連体形活用語尾で、後者の『なり』は断定の助動詞である」(類題類出)説明＝「後見人がしっかりといてゐる」といふ状態」「やせ重し」の対象＝「一の皇子」(最もシンプルな答えは「二」)

六 意味＝「間違はなく皇太子になられるお方(同義ならば可)「疑ひなき」は「疑いなく」でもいい気がする。「まつけの君」は「皇太子」)

七 訳＝「世間でも大切にお育て申し上げてるが」「かこつへ」＝「大切に育てる」。「ち」は逆接) 敬語＝「聞こゆ・謙讓語(補助動)八 訳＝「第一皇子は、第二皇子の容貌(お姿)には並びなされることもできなかつたのだ」「は」は原因・理由の確定条件)

九 訳＝「帝は(第一皇子には)通りいへん(＝表面上)格別の寵愛で、第二皇子を、かわいい秘蔵の子と思われて、大切にお育て」

十 訳＝「桐園の更衣は、元来、当たり前に帝のおそばにお仕えるはずの身分ではなかつた」「おほかたの」＝「当たり前」「普通」)品詞分解＝「名詞『上宮仕え』＋サ変動詞『す』連用形『し』＋尊敬の補助動詞『給ふ』終止形『給ふ』＋

十一 訳＝「更衣は、世間の評判もたいてい高く、貴人のく振る舞つてしたが」「おぼえ」は「世間からの更衣に対する」評判)」

十二 訳＝「帝が(更衣を)むやみに近くにおつきまつせなされるまじり」(脚注の20に従)。「給ふ」は尊敬の補助動詞)助動詞＝「せ・使役」

十三 訳＝「遊び」＝「管弦の遊び」(基本事項)とたなな参考書を見ても載つていません。今さら出なえが実子や外部模試では聞かれること)十四 訳＝「帝は、更衣を、まます先に参上させなされる(こ)」「まじ」は「行く」「来る」の謙讓語「参る」の略。

十五 訳＝「帝は、お覆過(こ)になし、そのまね(更衣を)おそばにお仕え申上げさせなされる(やがし)＝「そのまね」「まじり」助動詞＝「せ・使役」

十六 訳＝「帝が(更衣に対して)無理にそばから離れぬとお仕え申上げさせなされる(た)」「たぬ」＝「無理」)

十七 根拠＝「帝がこの更衣をいつもごもそばに仕えさせたから」(理由説明の語尾は必ず「〜から」「〜ため」。また「〜も必要」)

十八 訳＝「この皇子がお生まれなすつてからは」「お生まれなすつてからは」も可。皇子に対して尊敬。皇子＝「更衣の子(の)」「十九 訳＝「帝は、更衣のことを、格別(特別)に待遇しようとお心づもりなすつていたのだ」(脚注22)「ただのイイ女ではなく皇子の母とこ)」「二十 訳＝「第一皇子にも、悪くする(教科書は「皇太子」だが、また立太子してないので「第一皇子」がよいか)」「よくせず」の首便)二 訳＝「第一皇子が皇太子になられるのはなにか」(説明めざすこの点覚えておく)

助動詞＝「べき・推量・な・断定・めり・婉曲」「たろしか」＋「である」＋「のちひな」＝「なのではなにか」。「なめり」は「ごもそば」なるめり「が」な(た)めりとなつたもの。「なめり」と書くと読みは「なためり」)

三 訳＝「女御は、他の夫人たちよりも先に天皇のもとにおいでになり、(「参る」は帝への「給ひ」は女御への敬意)「参る」＝「入内」(シメタム。天皇と結婚する)。天皇のころは「内裏」(だいじ)。そこへ入る(と)か)」「四 訳＝「女御は、帝(から)の、特別なお気持ちは大抵でなく」「ななくならぬ」＝「並大抵でなく」「普通になく」。一心愛われている意味＝「ごらこせるのだ」「おぼえ」は「居る」(存在)の尊敬語。敬意の対象は「皇女たち」。「ち」は原因・理由の確定条件。)

五 訳＝「この女御の」忠告だけは、せまじり、むやみにつく、また気の毒なごだとお思ひ申ひなす(て)あはれられた、(「これら」＝「忠告」。「のみ」は限定「〜だけ」。「なほ」＝「せまじり」「あはれ」)。「聞こえ」は謙讓の補助動詞「聞こゆ」で、女御への敬意。「やせ」は尊敬の助動詞「やす」「給ふ」は尊敬の補助動詞。「一軍敬語」)

六 訳＝「更衣は、帝の畏れ多く、庇護を頼み、(こ)申上げながら、敬語＝「聞こえ・終止形「聞こゆ」・謙讓語(謙讓の補助動詞)」

七 訳＝「更衣を見し、欠点を指摘になる方」「おこつむ」＝「見す」「軽蔑する」。「きち」＝「欠点」。「給ふ」は尊敬の補助動詞。)

八 意味＝「なんとなく弱ま(こ)あじます」「もの」は「なんとなく」。「はかなし」は「はかなく」でも「こつこつ」が「頼りない」位)。

九 訳＝「更衣は、かえつて物思ひをなされる」「なかなか」＝「かえつて」。「給ふ」は尊敬の補助動詞。敬意は更衣)。

説明＝「身分不相応に帝に寵愛されるばかりに、ほかの女性たちの恨みをかかってしまつたため」「〜から」「〜ため」で、同義可。)

三十一 作品名＝「源氏物語」(紫の物語)、「源氏の物語」(光源氏物語)、「紫のゆかりの物語」(源語)、「紫文」(三笠堂「源氏物語」)「なむ可」。採点者が知つてなかつた話にならぬが)。

三十二 巻名＝「桐壺(巻)」(「光る君誕生」は第一学語社が便宜上付けたもの)。

三十三 作者名＝「紫式部」仕えた人物＝「中宮彰子」「藤原彰子」「一条天皇中宮彰子」なむ可)。

赤シートを使って暗記・確認用にご利用下さい。
各傍線は、それぞれ 敬語(動詞・接頭・接尾) 敬語(補助動詞) 助動詞 助詞など(重要語句等) を表す

この帝の御代でもうただらうか、女御・更衣が大勢お仕え申し上げていらした中、それほどの御書な身分ではない方で

いづれの御時にか、女御・更衣あまた候ひ給ひける中、いさむむことなきまはしはあはぬが

ひときわ帝の「寵愛を受けておられる方があった。 初めから私こそはと自負なわりのいる方々

すくれて時めき給ふありけり。 初めより我はと思ひあがり給へる御方々

目にもまるものだよ、軽蔑し、嫉妬なまの。同じくらしい身分の更衣や、それより身分の低い更衣たちは、なまをひ隠すかでない。

めざましきものに、おとしめ、そなみ給ふ。同じほい、それより下臈の更衣たちは、まじりすすからず。

朝夕の宮仕えにつけても、他の人の心を動揺させてはかりで、恨みをかつことが積もった結果なのだろうが

朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにはやありけむ、

たいへん病気がすたなうても、なごとなへ心細くつひに重なりまじりがすたなぬのを。

いとあつしくなりゆき、もの心細けに里がちなるを、

ますます飽きませぬとおしものとお思いになつて、人の非難をも、お氣になれぬ」ことがあつたにやいず。

いよいよ飽かずあはれるものと思ほして、人のそしりをも、え憚らせ給はず、

世間の噂にもなつてしまひ、そつな」待遇である。公卿や殿上人なども、無愛想に目をそむけそむけしなかりの。

世のためにもなりぬへき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつし、

たいへんまはゆいほの「寵愛である。中国でも、このよふことが原因となつて、世の中が乱れ、よくなかつたことだよ、

いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかることの起りにこそ、世も乱れあしかりけれ、

次第に、世間でも、困つたものだよ、人々の悩みのたねになつて、楊貴妃の例も引き合ひに出せられてしまつたよ、つひつへへの

やつやつ天の下にも、あぢきなう、人のもて悩みぐせになりて、楊貴妃のためにも引き出でつへくになりゆへに、

たいへん決まりの悪「ことばきけれ、畏れ多い」寵愛の、比類のないのを頼みこして、宮仕えをお続けになる。

いとほしたなきこときかれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みこして、まじりひ給ふ。

父の大納言は「くなくつて、母は北の方で、古い家柄の人で、教養のある人で、

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、

両親が「さういふこと、現在、世間での評判が華々しい、方々にまされほひあつたにや、いさゝか儀式の、支障を、なれ、たが

親つち具して、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたつたつたらず、何事の儀式をもまてなし給ひけれ、

これといつて、立派な、後見人がいないので、大切な儀式の時、は、やほり頼むことにならへ、心細くつひつへへの。

とりだてて、はかばかしき後見しなけれ、いさゝかあは、なほよひつひつなへく、心細けなり。

